



今月の大槌びと

吉田 研さん
(32歳・理学療法士)

埼玉県上尾市で育ち、東京の病院で勤務していた吉田さん。支援で訪れた縁から、2年前、大槌に住むことを決断し、理学療法士として町の人々とふれあっています。

「同じ職場に12人」から「町全体で6人」の仕事

吉田さんが大槌に移住することになったきっかけを教えてください。

吉田さん(以下吉)——東日本大震災後、陸前高田市などに来てがれき撤去をしていたんですが、ある人に本業である理学療法士としての力が必要じゃないかと言われて、確かにそうだと思いました。災害支援としての勤務先はいくつか



「ぬくっこハウス」にて高齢者と一緒に体操をする吉田さん

ありましたが、たまたま希望したのが浪板のぬくっこハウスだったんです。応援の立場から、移住するまでに至った決め手は？

吉——誘っていただいた、必要とされているのを嬉しく感じたのがまず一つ。あとは、以前の病院では、院内に12人の療法士がいたんです。大槌は、町全体で僕を含めて6人しかないんですよ。狭いリハビリ室に12人いる中で、

大槌での生活には「生きてる」感がある

大槌で生活してみて何を感じますか？

吉——仮設住宅に住んでいた頃、近所のおばあちゃんからどんこ汁をもらったり、季節や旬を大切にしたり、地域で「生きてる」感というのをすごく感じます。都会では感じない事ですし、体を動かすのが好きな自分にとって、自然に囲まれたすごく良い場所です。仕事面でも、高齢者の多いこの町が、今後の高齢化社会全体のモデルになれると前向きに捉えて頑張っています。



6月号 松岡雄也さん
7月号 吉田研さん

お二人ともインターンの形で大槌へいらしたわけですが、元々田舎暮らしへの興味はあったんですか？

松岡さん(以下松)——私の場合は、元々地元への意識やこだわりがあまりなかったのと、友達や田舎のおばあちゃん家に行くのをうらやましく思ったり、憧れみたいなものはあったと思います。地域おこし協力隊なども調べたりしていました。

吉田さん(以下吉)——私の場合は、来る前にはそういう憧れはなくて、こちらに来てから地域とのつながりとかを感じてすごいなと思うようになりましたね。

松——都会の人が知らない世界がたくさんありますよね。ウニがいつとれるか、とか(笑)。

吉——こっちに来て初めて知りましたね。言葉も最初は戸惑いましたし。

松——私たちの様に、移住してきた人が情報交換する場所があれば、外から人が来やすいかもしれないですね。観光にも役立つかも。

吉——転入届を出した時に、そういうコミュニティを紹介してもらえたり。買い物とか生活の不安を最初に相談できると助かります。

松——来たばかりの人が同じ立場を経験した人達と繋がれるのはいいですね。

